

「吉田文五郎師座談会速記」

— 関西大学図書館蔵「永見克也コレクション」より

はじめに

「吉田文五郎師座談会速記」は、近代屈指の人形遣いといわれた三代吉田文五郎の芸談を記録したものである。関西大学所蔵資料「永見コレクション」の中に収蔵されていた。

座談会は、昭和一四年（一九三九年）、大阪市阿倍野松崎町常盤通りの醍醐という店で行われた。一〇人の有志が文五郎を囲んで話を伺い、そのお話を速記したが、この記録である。

現在、まとまった形で読めるものとも古い文五郎の芸談は、昭和一八年（一九四三年）に桜井書店から出版された「文五郎芸談」であるが、今回見つかった記録は、それより古く、もっとも文五郎の肉声に近い形で残された記録であるといえる。

本調査報告書の目的は、この「吉田文五郎師座談会速記」を翻刻紹介するとともに、その速記記録を吉田文五郎の芸歴および大阪郷土史の文脈に位置づけることにある。それによって人形浄瑠璃文楽という珠玉の芸能が、大阪、とりわけ船場文化といかに強く結びついていたかを再確認できればと思う。



小笹
島川
智慶
章子

一、関西大学図書館所蔵「永見克也コレクション」について

「吉田文五郎氏座談会速記」は、関西大学図書館「永見克也コレクション」のひとつとして保管されている。関西大学図書館の「固定資産図書台帳 平成二年度(3)」によれば、コレクションの資料は、平成二年(一九九〇年)一〇月に中尾松泉堂から二三万円で購入されたところである。中尾松泉堂は、現在も船場の淡路町にある古書籍を扱う書店である。この書店は、永見氏が積極的にかかわっていた郷土史研究会「船場の会」の機関誌「船場」の広告主でもある。

永見克也コレクションにはおもに、文楽／歌舞伎／映画の写真や書簡、半券、新聞の切抜きなどが収められている。書簡には吉田栄三からの葉書などもあるが、ほとんどが映画の感想などを書いたものである。

コレクションの中で点数が最も多いのは、文楽や歌舞伎の舞台写真、および映画のプロマイド写真である。文楽の写真は全部で二二五枚ある。演目ごとに「関西大学」と印刷された茶封筒に収められている。写真はさらに「文楽」と書かれた薄紙の袋に入っている。茶封筒の表には、手書きで、演目名と写真枚数が記してある。この表記は資料購入後、図書館の受入担当者が記したものであろう(参考までに茶封筒に記載された演目名を文末に記す)。

コレクションはほぼ購入時の分類のまま、請求番号770・8*N1*1から84の連番を付して書庫に配架されている。詳細目録は作られておらず、関西大学図書館所蔵書籍データベース(KOA

LA)にもその記載はない。注記はすべて同じ表記——「スクラップブック(切り抜きほか)」「写真(映画、歌舞伎文楽関係)」「プログラム(音楽会、各種催し)」——の繰り返しである。ただし、現物には「文楽関係資料」「映画関係資料」など大雑把な分類タイトルが付いている。

配架時の分類が曖昧であるのに加え、特別な管理もしていないため、ファイル内の資料は入れ替わってもわからないのが現状である。じっさい今回報告する「吉田文五郎師座談会速記」も、文楽関係資料の箱ではなく、映画関係資料の箱の中から見つかった。

二、「吉田文五郎師座談会速記」を文五郎の芸歴に位置づける

吉田文五郎(本名・河村巳之助)は、人形浄瑠璃の世界に没入し、そこに浸りきって生きた人である。女方人形を遣わせたらほかの追随を許さなかった。文五郎の芸は、初代吉田栄三の「頭腦的な渋い芸と好対照をなしたはなやかな芸風(『日本芸能人名事典』、九九三頁)といわれ、しっとり艶っぽい、と形容されることが多い。天衣無縫の、何とも言い難い魅力にあふれたスター性を持つ、天才的な人形遣いだった。日本芸術院会員、東久邇家より贈られた難波掾の称号、文化功労者といった光輝に浴し、九二才でこの世を去る。

文五郎は大阪市南区豊屋町の生れである。豊屋町は、芝居町で栄えた道頓堀のすぐ近くにあった。幼い頃、両親に連れられて見た芝居や寄席が忘れられず、文五郎は一五歳で松島文楽座の初代吉田玉

造の息子・初代玉助に弟子入りする。松島は大阪西部の労働者を相手に発達した繁華街で、大遊郭を中心に劇場や飲食店が集まっていた所である。この松島文楽座で彼は吉田巳之助と名乗り、芸道に励むことになる。

ところが、明治十九年（一八八六年）、文楽座が松島から船場の御霊神社境内に移ってしばらくすると、巳之助はライバルの彦六座に貸し出されてしまう。吉田箕助と改名する明治二五年あたりからは東海道筋を放浪しはじめ、品行の収まらぬ日が続く。明治四〇年には彦六座系の堀江座で桐竹亀松を襲名するが、周囲に品行不良と批判され、名前返上という憂き目を見る。しかし明治四二年、三代吉田文五郎を襲名。堀江座の後身近松座が大正三年（一九一四年）に閉座の後、大正四年には御霊文楽座にふたたび迎えられ、転機となる。「イキの合った相手役」と文五郎自らが語る三代吉田玉蔵、そしてその玉蔵亡き後は初代吉田栄三を相手に芸を磨き、人形浄瑠璃界の重鎮へと上りつめていく。大正年間から昭和初年頃にかけては脂ののった「全盛期」だったと自ら振り返る。

したがって関西大学図書館の所蔵する「吉田文五郎氏座談会速記」は、昭和一四年の記録であるから、文五郎の「全盛期」に続く円熟期に記された芸談であることがわかる。

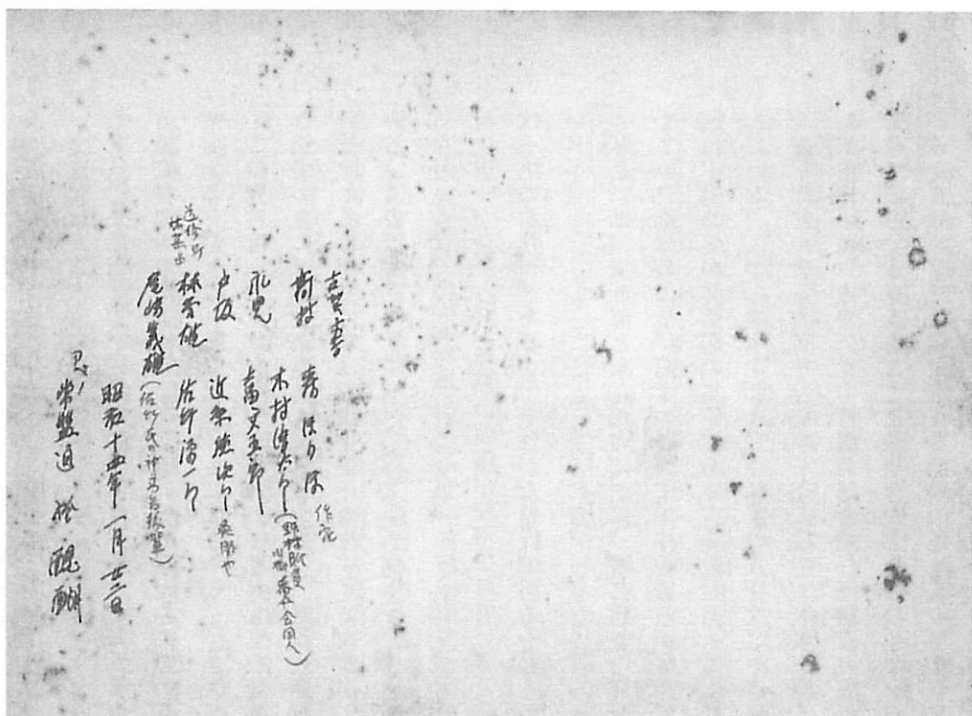
しかし同時に、昭和一四年といえは、国家総動員法制定の翌年、すなわち日本の戦争がいよいよ抜き差しならなくなる頃でもある。その強烈な愛国的排他的ナショナリズムの風に乗せられて、庶民の芸能であったはずの人形浄瑠璃も、世界に類なき日本固有の芸術として称揚されていくことになる。

三、「吉田文五郎師座談会速記」の便箋と大阪の船場商人

「吉田文五郎師座談会速記」は、この名人・文五郎の肉声が聴ける原資料であるだけでなく、文楽の支え手たちの顔の見える原資料でもある。

この資料は「永見コレクション」の一部として収蔵され、分類された袋の表には「文楽座名人 吉田文五郎師 座談会速記と写真一枚41枚」とある。袋の中は、清書が一六枚、メモ書きが二五枚入っている。清書は「コクヨ印（四十六号）」の縦書き、メモ書きには「株式会社 十八銀行京城支店」（二六枚）と「株式会社 十八銀行大阪西支店」（九枚）の二種類の便箋が使用されている。清書に「文貴は小生にあり」とあるが、それが永見氏であるかどうかの確証はない。

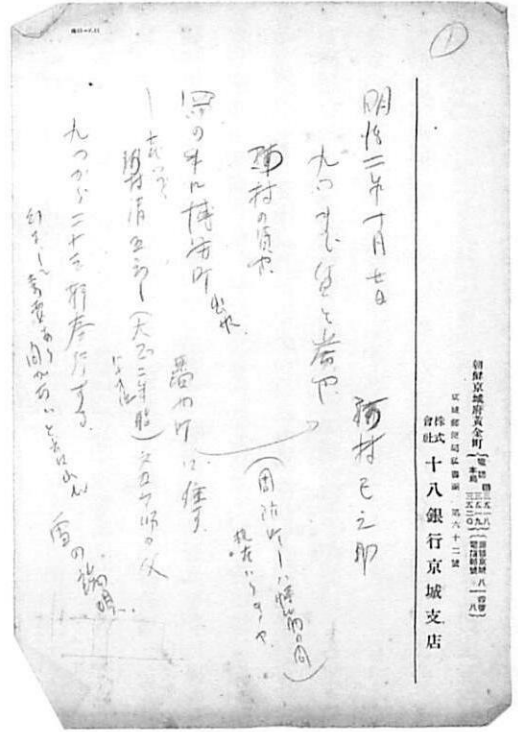
写真には、文五郎と永見氏のほかに、演芸画報の関西劇評を担当していた森ほのほや、関西の劇評家・林秀雄らが写っている。林秀雄は、道修町の林薬店の息子であり、戦後、同人誌「観照」を主宰している。この「観照」には、評論家の武智鉄二や戸板康二、河竹繁俊、作家の北条秀司や谷崎潤一郎、役者の坂東三津五郎らが寄稿し、豊竹山城少掾や二世中村鴈治郎を囲む座談会の記事なども掲載されている。永見氏もここに映画評などを寄稿していた。このことから文五郎の座談会は、単なる船場の趣味人の集まりではなかったことがわかる。



古賀文吉／高村／永見／戸板／道修町 林薬店 林秀雄／尾崎義雄 (佐竹氏の神高□後輩) ／
 [写真裏書き入れ 上段右より]

森ほのほ 作家／木村濱太郎 (野村BK員／川柳番卒会同人) ／吉田文五郎／近□徳次郎 呉服や／
 佐竹源一郎／昭和十四年一月廿二日／アベノ 常盤通。於 醍醐 [写真裏書き入れ 下段右より]

朝鮮京城支店
支店長 永見克也
支店員 永見米吉郎
支店員 永見友厚
支店員 永見三郎
支店員 永見一太郎
支店員 永見五郎
支店員 永見六郎
支店員 永見七郎
支店員 永見八郎
支店員 永見九郎
支店員 永見十郎
支店員 永見十一郎
支店員 永見十二郎
支店員 永見十三郎
支店員 永見十四郎
支店員 永見十五郎
支店員 永見十六郎
支店員 永見十七郎
支店員 永見十八郎
支店員 永見十九郎
支店員 永見二十郎
支店員 永見二十一郎
支店員 永見二十二郎
支店員 永見二十三郎
支店員 永見二十四郎
支店員 永見二十五郎
支店員 永見二十六郎
支店員 永見二十七郎
支店員 永見二十八郎
支店員 永見二十九郎
支店員 永見三十郎
支店員 永見三十一郎
支店員 永見三十二郎
支店員 永見三十三郎
支店員 永見三十四郎
支店員 永見三十五郎
支店員 永見三十六郎
支店員 永見三十七郎
支店員 永見三十八郎
支店員 永見三十九郎
支店員 永見四十郎
支店員 永見四十一郎
支店員 永見四十二郎
支店員 永見四十三郎
支店員 永見四十四郎
支店員 永見四十五郎
支店員 永見四十六郎
支店員 永見四十七郎
支店員 永見四十八郎
支店員 永見四十九郎
支店員 永見五十郎
支店員 永見五十一郎
支店員 永見五十二郎
支店員 永見五十三郎
支店員 永見五十四郎
支店員 永見五十五郎
支店員 永見五十六郎
支店員 永見五十七郎
支店員 永見五十八郎
支店員 永見五十九郎
支店員 永見六十郎
支店員 永見六十一郎
支店員 永見六十二郎
支店員 永見六十三郎
支店員 永見六十四郎
支店員 永見六十五郎
支店員 永見六十六郎
支店員 永見六十七郎
支店員 永見六十八郎
支店員 永見六十九郎
支店員 永見七十郎
支店員 永見七十一郎
支店員 永見七十二郎
支店員 永見七十三郎
支店員 永見七十四郎
支店員 永見七十五郎
支店員 永見七十六郎
支店員 永見七十七郎
支店員 永見七十八郎
支店員 永見七十九郎
支店員 永見八十郎
支店員 永見八十一郎
支店員 永見八十二郎
支店員 永見八十三郎
支店員 永見八十四郎
支店員 永見八十五郎
支店員 永見八十六郎
支店員 永見八十七郎
支店員 永見八十八郎
支店員 永見八十九郎
支店員 永見九十郎
支店員 永見九十一郎
支店員 永見九十二郎
支店員 永見九十三郎
支店員 永見九十四郎
支店員 永見九十五郎
支店員 永見九十六郎
支店員 永見九十七郎
支店員 永見九十八郎
支店員 永見九十九郎
支店員 永見一百郎



察したのち、実業界に身を投じ、堂島米商会所、大阪株式取引所、大阪商法会議所（のちの大阪商工会議所）などを設立し、大阪経済の近代的地盤を築いたといわれている。

永見米吉郎が、五代友厚と知り合ったのは、五代が薩摩藩の命令により長崎で砲術や航海術を学んでいた頃である。米吉郎の父・永見福十郎はオランダ貿易や大名貸などで財を成し、薩摩藩の御用商人を務めた長崎の大商人である。永見家は、汽船や武器の購入など薩摩藩の軍備増強に努める五代の仕事資金面から援助し、五代との緊密な関係を築いていく。

その五代に勧められて、永見米吉郎は、長崎から大阪にやってくる。慶応二年（一八六六年）、米吉郎は、大川町三九の一および二——淀屋橋の南詰め（現在の中央区北浜四丁目）——に敷地を購入し、永見商店を開業する。そして長崎の本家筋と連絡をとりながら、朝鮮や中国との貿易および金貸業を営むのである。なお五代友厚の屋敷は、淀屋橋の北詰め、現・日本銀行大阪支店の場所にあつたから、両者はスリーブの冷めない距離に住んでいたことになる。

そして明治二七年（一八九四年）、永見商店は、十八銀行に買収され、十八銀行大阪支店となる。十八銀行は、米吉郎の八つ年上の兄・永見伝三郎らが長崎に設立した銀行である。十八銀行はいちはやく朝鮮進出に取り組んでおり、仁川、釜山など日本人居留地のあつた開港都市に支店を開設、その資金母体となつたのが大阪支店であつた。そしてその支店長が米吉郎の息子・永見省一、すなわち克也氏の父親である。

しかし昭和前期、戦争がはじまり、政府が統制経済体制をしくと、

興味深いのは、メモ書きに十八銀行の便箋が使われていることである。この便箋と永見氏の間にはいったいどのような関係があるのだろうか。その意外な関係から見えてくるものとは、船場と長崎、朝鮮とのかかわりであり、大阪の人形浄瑠璃がどういった人々に支えられていたのかである。まずは永見氏の家系から見ていこう。

永見克也氏（一九〇四—一九九二）は大阪市の旧東区大川町に生まれている。大川町は、かつては四国航路の船着き場として栄えた場所であり、土佐堀川を挟んだ向かいには中之島がある。中之島は江戸時代に藩の蔵屋敷が集まっていた場所である。

永見氏の祖父・永見米吉郎（一八三九—一八八六）は、五代友厚（一八三五—一八八五）の執事をしていた人物である。五代友厚は、薩摩藩の藩士から明治政府の官僚となり、政府の命により欧州を視

十八銀行は困難な時代を迎える。十八銀行は大阪西支店など三支店を閉鎖し、朝鮮にあった九つの支店も当局の強引な指導により、やむなく朝鮮殖産銀行に譲渡してしまう。したがって昭和一四年の座談会に使われた二種類の便箋は、十八銀行が政治的圧力に屈して閉鎖、あるいは手放した支店のものだったことがわかる。

つまり、この便箋は、明治政府の殖産興業政策のもとで奮起した日本企業が、帝国主義的な拡張主義の波に乗って海外に進出するも、やがて暗澹たる環境下に退却せざるをなくなった足取りを示す痕跡なのである。そしてその便箋が、いよいよ戦争が泥沼化した昭和一四年の時点において、芸一筋に生きてきた文五郎の芸談を書きとめるために使われたというその事実は、何とも示唆的である。

四、「吉田文五郎師座談会速記」の内容とその史的価値

現在、まとまった形で読める吉田文五郎の芸談は二つある。ひとつは、昭和一八年(一九四三年)に出版された中山泰昌編「文五郎芸談」である。もうひとつは、昭和三四年(一九五九年)に出版された日本経済新聞社編「私の履歴書 第七集」の「吉田難波掾」である。両方とも、吉田文五郎の歩んできた道のりや芸に対する思い、思い出話などを文五郎自身が語り、その話を編者が芸談としてまとめたものである。

人形浄瑠璃研究者・内山美樹子早稲田大学名誉教授は、この二つの芸談について次のように述べている。「私の履歴書」の文五郎芸談は、話の裏をとってあるため記述は基本的に信頼できる。だが、

会話以外の文は、編者が大阪弁から標準語に変えている。そのため、この芸談は、文五郎の話を記述したものに違いはないのだが、彼の生の声から少し離れた観もある。一方、「文五郎芸談」は、文五郎が話す芸談を四六のエピソードに分けて記録しており、文五郎の、人形浄瑠璃に対する姿勢や美学を知ることができる点で貴重である。が、この芸談もやはり、編者が大阪弁を標準語に変えている。そのため文五郎の発話をそのまま記録したものではなくなっている。

今回見つけた「吉田文五郎師座談会速記」は、上記の二つの文五郎芸談と比べ、いくつか違いがあり、そこが本資料の大きな歴史の価値になるといえよう。

まず違う点は、「吉田文五郎師座談会速記」が書かれた年である。「吉田文五郎師座談会速記」は、昭和一四年に書かれており、現在、まとまった形で読める文五郎の芸談としては、最も古いものといえる。

また、「吉田文五郎師座談会速記」は大阪弁で記述されている点が大きな特徴であろう。すなわち前述した二つの芸談のように、編者が標準語に直していないのである。とはいえず速記であってテープ起こしではないので、文五郎の発話そのまま記録されているわけではない。しかし、少なくとも、大阪弁がもつ微妙なニュアンスが失われずに残っている点で、ほかの芸談とは異なる、より文五郎の肉声に近いかたちでの記録といえよう。

「吉田文五郎師座談会速記」本文は、速記メモの内容をほぼそのままに文章化したもので、筆者・編者による加筆、改変は殆どな

いと考えられる。例えば、ライバルの声をつぶすため、湯呑に水銀（本資料では「鉄」と表記）を入れたというエピソードは、『文五郎芸談』の「芸ねたみ」と同じ話だが、「吉田文五郎師座談会速記」の方は、特定の大夫の名を挙げて犯人とにおわすような発言がそのまま記載されている（あくまでも噂話の伝聞で、必ずしも事実とは思われない）。また、同時代の演者についてのあけすけな発言なども、他では知ることのできない貴重な記録であるが、これもごく少人数の仲間内で述べられた個人的意見である点、注意が必要であろう。

本資料は、従来の芸談に比べて分量が少なく、不明瞭な部分もあるが、昭和一四年時点の文五郎の芸に対する考えを、より文五郎の生の声に近い大阪弁で読むことができる点において貴重であるといえよう。

関西大学図書館所蔵の「吉田文五郎師座談会速記」は、これまでの文五郎研究、文楽研究にまったく新しい見解を導くような斬新な資料とは言えないまでも、既存の資料にはみられない情報を含み、文五郎の肉声により近いかたちで提供する点において、広く一般に紹介する意義は十分にあると考える。

おわりに

吉田文五郎が逝去して二日後、昭和三七年（一九六二年）二月三日の『朝日新聞』「天声人語」は、その死を悼みながら、文楽の行く末を案じ、次のように述べている。

……国民的存在だった文五郎亡きあと、次の紋下になれる名人達人はいても、文楽そのものが今後命脈を保っていけるかが危ぶまれている。“斜陽”どころの話ではない。大阪の文楽座が道頓堀に移ってから、古典物のほかにお蝶夫人、ハムレット、椿姫など赤毛物まで上演したが、四月興行で客席の半分も埋まらない窮状が続いている。大阪の庶民芸術の粋が地元でさえこの不振ぶり……滅びゆく一途しかない。

文五郎の没後、ひと月もたたないうちに松竹は、ついに文楽を手放すことを決意する。そして翌年、文楽の保護・振興を目的として文部省と大阪府、大阪市、NHKの助成により文楽協会が発足する。現在、その文楽協会への大阪府・大阪市の補助金が問題となり、文楽はふたたび大きな危機にさらされている。商業ベースでの存続が難しい芸能の継承をどうするのか、私たち一人一人が考えなければならぬ問題であろう。今回の「吉田文五郎師座談会速記」の翻刻紹介が、今後の吉田文五郎研究や文楽研究、ひいては人形浄瑠璃文楽の伝承とそのさらなる発展に、わずかでも寄与することを願っている。

翻刻は、早稲田大学演劇博物館助手で近代文楽を研究する小島智章氏に担当していただいた。先にも述べたように、本資料には注意を要する発言や明らかな誤り（例えば、〔7ウ〕に、文五郎の襲名を明治三二年（一八九九年）とするが、『義太夫年表 明治篇』所載の番付では四二年。また、〔14ウ〕に「廿四孝／御殿」として引用

する浄瑠璃本文は、「千本桜 すしや」など)があり、文楽の専門用語、人名、地名等、注釈を要する部分も少なくないが、この点については今後の研究に俟ちたい。

*調査報告書をまとめるにあたり、元関西大学教授肥田皓三先生、ならびに早稲田大学名誉教授内山美樹子先生に数々の貴重なご教示を頂いた。厚く御礼を申し上げます。

主な参考文献

- 倉田喜弘、藤波隆之編「日本芸能人名事典」三省堂、一九九五年。
- 国史大辞典編集委員会編「国史大辞典」第一四巻、吉川弘文館、一九九三年。
- 十八銀行八十年史編集委員会「80年の歩み」十八銀行、一九五八年。
- 水見克也「大阪開発の恩人五代友厚氏」、「船場」船場の会事務局、一九六六年六月一五日号、七・八頁。
- 水見克也「明治頃の大川町覚え書」、「船場」船場の会編集局、一九六七年一月一四号、一〇〇・一〇五頁。
- 林秀雄ほか編「観照」観照社、一九四六年八月から一九五二年七月。
- 宮本又次「船場」ミネルヴァ書房、一九六〇年。
- 宮本又次「五代友厚伝」有斐閣、一九八一年。
- 吉江集画堂地籍地図編輯部編「大阪地籍地図1 東・南区及接続町村之部」吉江集画堂、一九一一年。
- 吉江集画堂地籍地図編輯部編「大阪地籍地図2 西・北区及接続町村之部」吉江集画堂、一九一一年。
- 吉田文五郎「文五郎芸談」櫻井書店、一九四三年。
- 吉田文五郎「吉田難波掾」私の履歴書」第七集、日本経済新聞社、一九五九年。

表「文楽関係写真」内の茶封筒(一二袋)に記載された演目名

永見コレクションの文楽関係写真は、昭和初期に撮影されたものである。撮影年はバラバラで、たとえば一つの袋の中に昭和六年(一九三一年)から昭和十七年(一九四二年)までの写真が混ざっていたりする。主に劇場で発売されていたプロマイドであると思われるが、これだけまとまった量の写真はめずらしい。これらの写真からは、衣装や舞台演出が現行と異なる部分があることがわかり、また中には希少な写真も含まれているようである。一例をあげると、「昭和の三名人」といわれた吉田文五郎、吉田栄三、桐竹紋十郎の顔が写った「義経千本桜」や、糸操り人形の静御前、戦災では焼失した文楽首の写真二三点などがある。

- 文楽座 一七枚 夏祭浪花鑑、双蝶々曲輪日記、摂州合邦辻、加賀見山旧錦絵
- 文楽座 二〇枚 中将姫(鶴山古跡松)、鰻谷(櫻鑄恨鮫鞘)、岸姫(岸姫松曹鑑)、帯屋(桂川連理桐)、三十三間堂棟由来、平家女護島、義経腰越状
- 文楽座 二七枚 伊賀越道中双六、菅原伝授手習鑑、源平布引滝
- 文楽座 一五枚 冥途の飛脚、心中天網島、駱文章、傾城阿波の鳴門
- 文楽座 一四枚 紙子仕立河面鑑、艶容女舞衣、近頃河原の達引、伊達娘恋緋鹿子、恋娘昔八丈、染模様妹背門松、新版歌祭文
- 文楽 一五枚 義士銘々伝ほか
- 文楽座 二六枚 近江源氏先陣館、義経千本桜、妹背山婦女庭訓、一谷嫩軍記、源平布引滝、
- 文楽座 一五枚 和田合戦女舞鶴、鎌倉三代記、奥州安達原、玉藻前暇袂、伊勢物語、彦山権現誓助剣、伽羅千代萩
- 文楽座 一四枚 娘景清八島日記、楠昔嘶、吃又(傾城反魂香)、蝶花形名歌島台、刈萱桑門筑紫蝶、日吉丸稚櫻、国性爺合戦
- 文楽座 九枚 忠臣蔵、本朝廿四孝、絵本太功記
- 文楽座 三〇枚 世話物
- 文楽 二三枚 人形首

凡例

・「吉田文五郎師座談会速記」は、①質問事項を簡条書きにしたメモ（株式会社十八銀行大阪西支店）用紙九枚）、②座談会の速記メモ（株式会社十八銀行京城支店）用紙一六枚）、③速記メモをまとめて文章化した本文（コクヨ印（四十六号）レポート用紙一六枚）の三種からなる。本稿では、質問事項メモと本文を翻刻し、本文と内容の重複する速記メモの翻刻は省略した。但し、内容の重複しない記述については、本文の後に「速記メモ 断片」として翻刻した。

・本資料には、事実の誤り、誤字、当て字と思われる記述も見られるが、修正は加えず、原本通りに再現した。例・依然↓以前、奉行↓奉公など

・翻刻にあたっては、原則として通行の字体に統一したが、固有名詞などに一部原表記を残した。

・原本の頁数（枚数）は袋に収められた順番のまま、本文の後に〔〕数字で示し、オモテ、ウラの別を略記した。

・原本の上位に記された小見出しは、本文の前に二字下げで示した。

・原本の改行は「／」で示し、内容に応じて適宜改行を施した。

・原本の句読点は、「。」で統一し、読みやすさを考慮して適宜一字空白を設けた。また、原本の○表記や本文に付された傍線、波線、傍点はそのままに再現し、本文脇に書き入れられたメモ、注記などは「―」で区切って適当な箇所に入れた。判読困難な箇所は「□」で示した。

・原本の筆記には、黒と青のペン、黒と赤の鉛筆の四種の筆記具が使用されているが、その区別は再現しなかった。

「文楽座名人／吉田文五郎師／座談会速記と／写真一枚 41枚」
関西大学図書館蔵書印

〔袋表紙〕

質問事項メモ

一、さわりに一定の型ありや

一、名人の逸話があれば

一、人形遣いに秘伝ありや

一、油屋の型を伺ひたし〔17才〕

一、太十の操が母臯月の死を知つてかけ出る時に依然／さしてゐた銀打一本を持つて（取りはずして）出ると言ふ／が 人形には如何。／

外に斯様な観客に知られざる 言はば口伝と／言つたものなきや

〔18才〕
一、両わ うばわけ（かたはずし／銀一本ぬくと下げ髪―

一、女形人形の頭の重なるもの

一、遊女。娘。女房。奥方など相違点を何処にて／表はすか
十、女形を

一、三年でつぶれる／彦六座／
御霊文楽入座の時。／大正四。一。四日。／太十／中将姫
雪のや／酒屋内 お園／一〔19才〕

- 一、女形を使ふ時に一番苦勞する点
- 一、女形人形で一番大物は何か

男人形の陣屋熊谷の如きもの／板額など その部類にあらざるや
 一阿古や。夕霧。宮ぎのー

- 一、女形人形に足のあるもの

お初 奥庭の岩藤。日向嶋の糸滝の外

ーおのおー (20才)

文七 光秀。五右衛門。貞任。熊谷。

孔明 由良の助。菅相丞

団七 宗任。権太

源太 重次郎。三浦之助。義経

動きの源太(眉動く)

若男 勝頼。忠兵衛

丸目のしゆとー剪ー 太郎左衛門。師直。梶原。

ふけをやま 操。相模。千代

娘 八重。初菊。時姫。しのぶ

新造 ー梅川／おかるー をやま傾城。阿古屋。夕霧。宮城野。

ー眉を入れてかき／まゆげをかくー 梅ヶ枝

婆々 (21才)

- 一、人形を使ふ時の人形使の目のつけ所は何処か
- 一、足拍子は如何なる時にトントうつか

- 一、後姿の見得は大体如何なる時になされるや (22才)

一、人形使が声を出さぬと大夫が語れぬと言ふ狂言は

権太の 何ぢや

- 一、役者と人形使ひの関係

一、京や(雀右衛門)の人形振と文五郎

一、六代目に教えたと言ふ三浦之助について (23才)

- 一、一三ー文五郎師は初代なりや

ー吉田巳之助／亀松(先代紋十郎の前名)／

朝日の／岡田に／文五郎。／

明卅二年。／

兄。文三郎／文五郎／文三一

- 一、その出生。年齢

玉七ー71ー 玉次郎ー68ー 小兵吉 政亀

- 一、現在の人形使と貴方達との時代の相違 (24才)

一、今現在の太夫で人形を使ひ難いと言ふ太夫なきや

ーこちらから合はすー

- 一、次期の紋下は誰か

一、今は出ぬ狂言にてやりたき狂言は

一、番数はいくつ御存じや／出来ざる狂言なきや

- 一、未だ使はれざる狂言ありや

ー小よし／川中島のババ／廿四孝のババ たけのこほり／微

妙 みみやう／覺寿 かくちゆー〔25才〕

本文

文楽座名人／吉田文五郎師／座談会速記／昭和十四年壹月廿二日／阿倍野 醍醐／文責小生にあり〔表紙〕

文五郎生立

私は本名を河村巳之助と申しまして明治二年十月廿日に大阪／周防町と八幡筋の間の畳屋町に生まれました／現在その家は張物やになつてゐますが。河村の質家と云つて／附近では有名なものでした。質家も七八軒ありましたし／親父まで六代代々名河村清五郎を継いでゐました。／

親父の六代目清五郎は大正二年に八十歳位で死にました。／明治になつてから何代目清五郎などを何代目をつけなくなりましたから清五郎名は親父の六代目で終わりです／

私はそこで九ツの年まで家業の質家と炭やをしてゐました／尤も四ツの時に博労町のある家へ養子にゆきました／養家先が出取のためになくなりましたので又元の生／家へ帰りました／〔1才〕

玉助に弟子入

九ツの年から奉行に出まして二十三軒奉行先をかわつて／十五ツの

時に遂に初代玉助さんの弟子になりました／

私の祖父はちよつと名の表れた人でこの人の作つた端唄の／「雪」は当時大分流行した端唄でした／そんなわけで私も満更芸事には素養がない方では／なかつた様で三味の合の手などを手拍子とりなどして／祖父母に間のいい子ぢやと云はれたりしました／

この師匠の玉助は名人初代玉蔵さんの息で卅才で死／なれました。私が弟子入りした時は玉助さんは廿四の／時でした／玉助さんはよく私を供にして方々へ行かれました／それでも仲々厳格で「一尺離れて師の影を踏まず」／〔1ウ〕と云つた歩き方の供の仕方です／

新町花魁道中

新町の廓がまだ花魁道中をやつてゐた所で。例の三本／足の黒ぬり下駄で八文字を踏んでゐる。それを見て／そのすその具合をよくみて置くと言はれたりしました／

天神のやぶさめ行事―矢鎬馬―

西洋の油画も入つてゐる頃ですから西洋流の馬の乗方のりかた／もありましたが。日本古代の馬の乗り方は人形使に必要／ぢやと云はれて。それには。天満天神さんのやぶさめの／式の馬をみて置くと云はれました／

夜道ヨミチを歩いて提灯持つて先へゆく私を捕へて「先へ行／くのもいいが。それではお前の体の影で道が見えぬ。／提灯は横へ持て。それ

も真横では提灯の火で／お前が歩かれぬ 横へ少しはなして歩け」
／〔2オ〕と云はれました／

松島八千代座

その頃は芝居は午前五時の開幕でした／ですから家から松島の八千代座までゆくのに歩いて／午前二時頃から出かけて誰れも居らぬ楽屋へ入り火を／いこして部屋をぬくめ。師匠などの草履ゾウリや下駄をキチンと／順序よく並べて置くのです。／

その頃は博労町の稲荷から日本橋まで車賃は三銭／でした。／それ
でよく車夫に「ぼんぼん乗つてんか」と云はれました／が。勿論乗
れませんでした／無給でにぎり飯に梅干を持つて行つてかよつてゐ
た／時ですから／〔2ウ〕

その頃風俗

その頃の風俗を申し上げれば明治五六年頃までは／船場の嬢いとはん
は。後にえり掛（お半。酒屋のお染等）／（肩の所へ襟から垂して
ゐる前掛の小さな様なもの）をして／おましたし。肌には「すつぽ
り」（まあ金時の胸あてと云／つたやうなもの）をしてゐました
そしてこの上へ着物を／着てゐたのです／

男は「山ほこ」と云つて手拭を二ツに折つたやうな頭巾／をかぶつ
てゐました ※頭巾の絵／その頃の興行は九十日打つて又八十日同
じ狂言をあ／たれば打つたりしてゐました／

始めての給金

丸三年目に生れて始めて月給を十五日に廿銭。／穴あきの一厘銭で
もらひました／〔3オ〕

十六文銭もあつた頃で十六文銭二ツで一厘でしたかね／おからが二
厘であつた頃です。／

申し遅れましたが我々社会では。今でもそうですが／十五日が単位
でお給金をもらふのです。それ以上の／興行は日割です／

芸を研げ

始めてお給金を廿銭もらつた時に師匠はこう云ひました／「銅貨が
欲しくば銅貨にこれ。銅貨にこれは銀貨／にこれ。銀貨にこれは紙
幣紙幣にこれ」／これは芸を研げと云ふことです／芸を研げば自然と給
金もよくなるといふことを／云つたのです。

現在文楽人のだらしなさ

序に申して置きますが現在は昔と違つてよき名／〔3ウ〕跡をつぎ
たい つぎたいとそれのみを願つて芸を研ぐやうな／心振のものは
一人も□ません／まあよい名跡イセキをついでその披露にウント一時金を
皆さんから／もらつて しばらくたつてから廃業して町方の師匠に
なり／地道に生活方法たてる。そんな風な男が多いので／す。名前

は申しませんが沢山あります。／

又廿歳で身はキチン宿に泊まつてゐても羽織を着て楽屋入りをなす。そんな連中はかりです。／私の若い頃は羽織なんでもつての他でした。一人前の人形使になつて始めて着られるのです。／

今六代目菊五郎の床を語つてゐる鏡だつて給金で困つてゐたので三味と二人で六百円出すと云ふので「4才」渡りに舟と喜んで行つてしまつたのです。／

そりや賈方がお聞きになれば吃驚なさるやうな／安い給金です。／まあ顔を出使ひの時に出して使へる連中位が現在どう／にか給金をもらつてゐるやうな次第です。／どうしたつて一日に二円として六十円の月給は最底／してもらはねば生活は出来ません。／

生活の安定即芸術

生活の安定あつてこそ芸にも実が入るのだと／私は思ひます。／現在の人形使は卅四人です。人形使。文楽の保存。それには是非とも生活の安定／ですぜ。／「4ウ」

この私の師匠初代玉助と父の違ふ兄弟が有名な初代紋十郎だす。／今の佐七と云ふ人の姉で人形使。門十郎の女房で／おひいさんと云ふ人が二人の母親だす。／門十郎はんは新町廓の「琴和」と云ふ芸者に手をかけ／て病氣をうつされ。死なはりました。／この頃は「コレラ」が流つた頃でコレラのことを「トンコロ」／云うてました。／
—紋十郎の紋は父親門十郎の門弟などに門造云ふのなど／があり。自分も母は同じでも父が違ふので門の字をさけて紋の字にされたの

です。／

当地の五座

その頃の道頓堀は五座だした。角。中。大西。竹田。若竹云ひました。／朝日座は角丸云ふて寄席の小屋だす。現在の朝日／座の東側にあつて入口は東から入りました。／「5才」角は右團次。中座は中村宗十郎。大西は尾上多見蔵／が座頭だした。／

若竹

若竹座は何処にあつたかと云へば。現在足袋のせり売り／をしてゐる所にあつたが。私の六歳の時に焼けました。／

竹田

竹田座は現在の弁天座だす。／「大阪道頓堀竹田の芝居。銭が安うて面白い」／と云はれたもんだす。／
妙な話をしますが右團次が国定忠次の妾に生した。／子が東京の小團次だす。／この右團次は齊入の親父さんだす。／芝居も五厘や一銭でいい席で（二等）みられた頃だす。／「5ウ」

千日前の話

千日前はまだ墓地で誰も買ふものがなく。おし置場／があつた頃で毎日罪人が首を打たれてました／その千日前の土地を名古屋の横井寛七云ふ人が／坪一錢五厘で買ふだとだす／そして「横井座」云ふものを建てて地方の役者を入れてみせてました／この横井の鑑札がなければあそこは通れなかつた／ものだす／

うどんなやかしわや。ぜんぜいやなども今のやうに／勿論沢山なく。皆一軒づつしかおまへなんだ／うどんなは五厘でした。今の丸万の所にありました／かしわやは道頓堀京やうのかしわ云うて 今の角や／「6才」食堂の所だす／ぜんぜいやは〇〇亭云ふて今の「蝶や」の辺だすかなア。／

この頃に大芝居が大西の席(浪花座)におました／鎌三で／三浦之助 延若 母 宗十郎。佐々木 多見蔵 富田六郎 吉五郎(四代目前)／時姫 璃寛 米カシ女 雀右衛門 局二人 雛助。仲助の配役で三銭でみせましたぜ／

松島八千代座(文楽)―明五。一月―

松島の八千代座が出来たのは明治四年だす／

沢の席―明十六。六月―

明治十六年のかかりに沢の席が日本橋北詰今の／安井道頓の碑のある所に出来ました／

彦六座―明廿一。二。八。焼上―

明治十七年の正月には博労町に彦六座が出／来ました これは三年でつぶれました／(6ウ)灘のともえの主で その頃の大金で金廿五円を出して／作らりました。この人は素人で大変義太夫の／上手な人で後には本職になつて柳適太夫云ふた／人だす

松島文楽の顔振れ

その頃の八千代座(文楽座)の大夫は／越路(後の摂津大掾) 岸太夫。津太夫(法然寺)／繁太夫。それに越路の四天王云ふて常子太夫／むら太夫(越路)。多門太夫。路太夫(京先斗町で死す)／―現津太夫は浜子太夫云ふて浜太夫の弟子。文大夫から／津太夫になる― 三味は団平。広助。／人形は玉蔵。玉助。紋十郎 私もゐました／

私は始め吉田巳之助。次が吉田亀松。―(亀松は先代紋十郎の前名です)― そして／朝日新聞の最口にしてもらった岡田さんから／(7才)名前を替えとしきりに云はれて明治卅二年に現在の／吉田文五郎(三代目)を継ぎました／

その文五郎になつた時 さる老女のヒヒキ客の／所へ今度文五郎と名を替えましたと挨拶に行／きましたら／「なんや文五郎はんか。おかしな名前やなア。／同じ替えるやつたら人形使は玉蔵か紋十郎／をもらひんか」／云はれました

この三味の二代目広助は仲々名人だす。始め広作／＼云ひました。又。広助の家はよく猿の字を使ひま／＼す。猿糸。猿□郎。猿太郎なんか皆広助系統です／＼〔7ウ〕

彦六座にもゐりました。／＼現文楽玉七ー（現七十一歳）ーの兄は名人玉蔵です／＼

御霊文楽—明治十七。九—

明治十八年五月四日に御霊文楽が出来てそこへ／＼全部うつりました。／＼その時の出し物は菅原の通し／＼でした／＼

土佐太夫のこと

現土佐太夫はその頃転々してゐましたが／＼明治四四年に近松座が（現在の四ツ橋文楽）出来て／＼そこへ春子太夫。伊達（土佐）太夫。大隅太夫など／＼とゐました。／＼大体あの男は大無茶苦茶だす。私も芸が可愛いし／＼又今では小屋が一ツしかおまへんよつてに一緒に仲／＼よくつき合つてゐましたが。まあこんな話がおます／＼〔8オ〕

近松座の時の話だす。／＼忠臣蔵の七段目で大隅が由良。伊達がおかゝる。／＼そして素人から来た錦太夫が平右衛門を語ることに／＼になりました。／＼伊達は前から師匠大隅に反感を持つてゐたのかし／＼りまへんが素人の錦と一緒にゐるのを語るの嫌／＼だと云ひました。／＼そこで大隅は「わしが目をつけて。これならと思ふて／＼連れて来た錦や。わしも由良になる。お前が／＼おかるをつき合つて花を搦へてやるの

が情けやないか／＼第一お前が今おかるを語れるやうになつたのは／＼誰のお蔭や」ときめつけました。／＼〔8ウ〕

併しそんなことで。とう／＼大隅は伊達や。春子等の／＼反対で弟子からの反対破門で追ひ出されて／＼氣の毒に台湾で病死しました。／＼

土佐太夫の名前かて静岡で九十歳で死んだ誰も／＼知らない名前を自分勝手に継いでしまつた／＼んだす。このことは私だけしか外の者は誰も知り／＼まへん。／＼そして又勝手に撰津大掾ジツヂョウの弟子になつてまね／＼無茶な男だす／＼まあ岩崎さんなどのいい旦那を持つてますけれど。／＼昨年五月の引退興行かて。後進の道を開き／＼後進を教へる大将になる云ふ話が出て。／＼〔9オ〕お上から幾らか金が出る。そしたら岩崎さんが五／＼十萬円出してやると云ふ話があつたんだす。／＼その見通しがついてゐたもので出る氣になつてゐました。／＼そこで文楽の方でも先手を打つて引退披露興行／＼してやらう。そしたらもう何処へも出られない。／＼床語りにも出られない文楽へも勿論出られない。／＼まあそんなわけでした。／＼

所がお上の金は今だ出まへん。岩崎さんに頼／＼んでも。お上から金が下りたら。わしはいつでも／＼出してやる言ふたはるそうだす。／＼まあ云へば自業自得のやうなもんだす。／＼〔9ウ〕

この大隅太夫は實際大名人でした。／＼今は上手な人が多くて名人がおまへん。／＼

私等仲間でも。舞台で「一尺動いてお観客には一寸／＼位の動きにしが見えまへんさかいに。割によう動き／＼ます。まあ手荒い使い手がおまんア。／＼

大隅と越路

大隅と越路の浄瑠璃を比較したら千両と一両だす。／それで大隅を越路は目の上のこぶみたいにしてるま／した／ある時ではその咽をつぶさそうとして。その呑む湯／呑に鉄を入れましたが 神が知らせたか呑まうとし／て中をのぞけば油が浮いてゐたので大隅はそれ／を呑まなかつた。呑めば大変なことだす／〔10オ〕咽が一ぺんにつぶれますさかいになア。／
大隅太夫は実際よく我々人形使をかばつてくれ／ました 私等も随分お世話になりました／

文三郎。文五郎。文三

文五郎の名前は仲々よい名前だす。／文三郎が長兄で中が文五郎。末弟が文三云ふて いづれも／名人でした／

人形について

女形の人形の頭は／

ふけおやま 操 相模。千代／

娘 八重。初菊。時姫 しのぶ／

新造 おやま傾城 梅川。おかる／

婆々／

ふけおやまに眉を入れて阿古屋。夕霧。宮城野／〔10ウ〕などを作る 石割さんの頭の分類では駄申―無理―です／

三姫

三姫は 八重垣。時姫。雪姫。／

八重垣。時姫。初菊などは文献（けい）を検べてもない／人物で実在ではなく作者の作ったお姫様ですが雪姫は実在で絵描狩野（カノ）の娘です／ですからその爪先で桜の落花を集めて鼠を描けば／それが本物の鼠になつて現われて いましめられた／繩をかみ切つてくれて。又落花を消せば鼠の姿は／なくなるのです／

三婆々

三婆々は たけのこ掘り。（ミミコ）微妙 覚寿。／外に小よし。川中島の婆々など六ヶ敷しい／です。／〔11オ〕

現在は―の―太夫は実際咽が声がつづきません。昔の人なら／五ツ行つた所が三ツ位です。

ですから人形の方から太夫に合せてゆくのです。／悲しいことに人形は物を云ひません。ですからどうしても／下から出なければなりません。／

太夫のよい年配

大夫は死ぬまで稽古して まあい時は高々十年ですぜ／三十年はどうしても咽を使ひ。咽を破つてしまして／六十位になつて始めてよくなる。そしていい時は十年／七十になればもう老ひ込んで駄目です／

人形だつて足から入つて三年。左使ひになつて／呼吸を覚え。そして一本立につて頭を使ふのです／足になるまでに院本を暗記して小道具を全部／(11ウ)揃えるのです／

役者と違つて浄瑠璃は待つてくれません。お茶。お菓／子と云へば直ぐ間に合はねば駄目です。／

又私等のはく下駄にしる。高低種々あります。／それを皆狂言によつて合はさねばなりません。／

人形持出し説明

番数はいくつ御存じや 女形人形なればもう何万と使つておます。／

使はれざる女形なきや やらないやうな人形はまつないでせう。／

足拍子はいかなる時に 足拍子は三味の手によつて打ちます。／

後姿の見得は 後姿の見得はその文句によります。／

人形を使ふ時の目のつけ所 人形を使ふ時の目のつけ所は。丁度人形の目にあたる後髪／の所です。／そして右手の先きが始終人形の目の向ひてゐる所です／(12オ)よそ見して物がとれる筈がありません／

肩の動きが大切

肩の動き一ツで色気を出します。／机にもたれるにしても肘だけ持つて行つたんでは何にも／なりませんや。やはり肩と体と一緒に持つて行きます。／だから踊りをみてゐても肩の動きをみればいいのです／

人形振から踊諸流

元来踊りはどんな踊りだつてその振りは人形から／出てゐます。／山村流 坂東流 西川流 皆そうです。／

人形の起り

人形は御承知でせうが傀儡師から出てゐます。／箱をぶら下げてその上へ棒の上に頭だけつけた／着物を着た人形が首を動かすのです。／それから変じて錦絵によくあるやうな手をつき出し／(12ウ)て着物の中へ入れて身振りをさしたのです／その頃は顔は勿論身体さえみせません。／それから顔を出すやうになり。遂には人形使ひの体／も出すやうになつたのです／

人形使黒衣の起り

昔天子様の母御前が乳呑子様にお乳をあげてゐられて／どうしてもお子様がお乳をおはなれ遊ばされない／そこで傀儡の人形を使つてみせられた所。その人形に／氣をとられて乳をはなれられた／併しこちらの顔を近づけるのが恐れ多いので袖を／ちぎつて頭巾とした／それが人形使の頭巾であり。黒衣はそれ故に袖／がありません／〔13才〕

ですから昔は頭巾と黒子は御燈火をあげて祭／つたものです。今は我々もませんが。／それが黒の着付に麻袴で太夫も人形使も着るやうに／変化しました／その時の舞台の後は白と紫のんだんたらを幕を垂しました／

天子様の輪詞のこと

ですから操人形には／「日本第一御能諸芸の長」／と云ふ輪詞を頂戴致して居ります。／竹田の芝居(弁天座)と淡路に二ツ下りました／併し惜しいことに竹田の方は火事の時に焼いて／しましまして今はありません／〔13才〕それ故に今でも淡路の方が人形の本場のやう／に言はれる方がありまして 我々によくどちらが本場ぢやと尋ねられます／

女形人形の大物は

板額など大物で重いですが阿古屋。夕霧。宮城野／などそれに劣りません／殊に阿古屋は男人形の熊谷程の重さがあります／

女形の足のこと

女形には足のないものとしたのです。／それ故に足のあたりにあたるふきの裏の所につまみがあります。それを持つて足使ひが足かある如くみせるの／です。／膝をまげて片足立になった時は足使ひが腕を入れ／で立膝をしてゐる如く見せるのです／〔14才〕併し足のある人形もあります。つまさきからげた／役の人形にはどうしても足は必要です／お初。奥庭の岩藤。日向島の糸滝 しのぶ／

じゆのうまげ

初菊。道行の小浪などのまげは「じゆのう」と云ひます。／

うばまげ

操のまげは「うばまげ」(片はずし。両わなど云ふ)／このまげで銀の平打をぬけば下げ髪になります。↓下げ髪は／上使を待つ時の髪ですー／

さわりに一定の型ありや

さわりには別に一定型などありません／その文句によるのです。他

人の事を云ふ時には前方をみ。自分のことを云ふ時には袖をみませす
／

廿四孝／御殿 絵あるやうな殿御のおいで／

両袖を合はせて組みます 殿御の振りです。

炬燵 女房の心には蛇が住むか鬼が住むか／〔14ウ〕

両手懐中です。女房は口では何も云ひませんが その心の／中は火の車です。質やへ行かうか明日からどうしようかと／全く心の中は火の車です。／

近江伊賀

我々仲間で「近江」か「伊賀」と言へば。それを云ひ出す／方は仲々
浄瑠璃のうるさい方を指します／近江とは近江源氏八段目 陣屋で
す／伊賀は伊賀越八段目 岡崎です／

太閤記を太夫は物にせよ

まあ太閤記全段がせめて太十が巧く語れば／いい太夫です 出場
人物があらゆる複数の年配をふくんでゐるからです／
今の伊達太夫は明けて四十三歳。入座以来十年です／始めはみす内
で「ドッコイシヨ」といつたものです。／〔15オ〕

御霊文楽入座

大正四年一月四日 その時の出し物は太閤記の通しに中将姫雪貫
そして／酒屋でした 私役は中将姫雪のや。それにお園でした

※以下余白〔15ウ〕

速記メモ断片

鐘入の話／重の井／定之進の頭／鐘の中では切腹する／道成寺の初
きり／〔10オ〕

金平利生記／毛谷村六助 のニツは□□の目通りの仇打／
かんざしの始め。／マヤ夫人（三年三月母体）／が風に吹かれて来
る花を／「カザシ」の花〔11オ〕

文五郎師 十六歳の時／

みす内／松山の□□や／摂津大掾／津 大隅 たけのこほり／めく
らのすみ 子別れ／

十伊勢木末十／主用に／入座の筈〔14オ〕

古代研究。折口信夫 三冊 K1502／ニコマコス倫理学 高田三郎

／K1502／

小寺融吉 150／おどり名曲解説 役者論語 20／全三冊 守隨齋
治編／

藤十郎の芸／芳沢あやめ／塵外集／佐渡島伝八〔15才〕

東区豊後町木村松之助〔15ウ〕

（笹川慶子 センター研究員／関西大学文学部准教授）

（小島智章 早稲田大学演劇博物館助手）